

令和8年度第1回中野区総合教育会議

- 1 日 時 令和8年（2026年）7月31日（金） 開会：10時30分
閉会：11時39分
- 2 場 所 区役所7階701・702会議室
- 3 出席者 （構成員）
区長
教育委員会教育長、委員
（関係職員）
青山副区長、栗田副区長、企画部長、総務部長、子ども教育部長・教育委員会事務局次長、子ども教育部子ども家庭支援担当部長・教育委員会事務局参事（子ども家庭支援担当）、総務部総務課長、子ども教育部・教育委員会事務局子ども・教育政策課長、教育委員会事務局指導室長
- 4 議 題 ①不登校生徒の進路について
②子どもが考える修学旅行について
- 5 傍聴人数 12人

6 議事経過

【午前10時30分開会】

[総務部長]

それでは、ただいまより中野区総合教育会議を開催いたします。

私は、本日の司会を務めさせていただきます総務部長の濱口でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

教育委員の皆様には、お忙しい中ご出席いただきまして、ありがとうございます。

この総合教育会議は、区長と教育委員会が教育行政の大綱や重点的に講ずべき施策等について協議・調整を行う場でございます。自由な意見交換を通じて、区政と教育行政の連携を図り、効果的に教育行政を推進していくことを目的としております。

それでは、本日の議題についてご案内いたします。

①不登校生徒の進路について、②子どもが考える修学旅行についての2点についてご協議いただきます。

進行につきましては、議題ごとに担当から資料の説明を行った後、ご協議をしていただきたいと思いますと考えてございます。

それでは、議題の1つ目、「不登校生徒の進路について」の協議に入ります。

まず、資料について、指導室長から説明をお願いいたします。

[指導室長]

それでは、「不登校生徒の進路について」をテーマにし、中野区における不登校支援の考え方、多様な学びの場の整備、進路指導の取組、そして実際の進学状況などについてご紹介をさせていただきます。

中野区では、「全ての児童・生徒が自分らしく学ぶために」を基本的な考え方として掲げております。不登校支援は、単に学校へ戻すことを目的とするものではなく、子どもたち一人ひとりが自分らしく学び、成長できることを大切にしております。

また、学校や地域の中で誰もが学び続けることができ、自分のやりたいことに挑戦できる環境づくりを進めてございます。これは、中野区教育大綱に示されている「いっしょに学ぶことのできる教育のまち」の実現につながる取組でございます。

令和7年度に策定しました「中野区不登校支援の基本方針」では、児童・生徒一人ひとりの思いを尊重しながら、社会的自立を後押しすることを目的としてございます。

不登校の要因や背景は、子どもによって異なります。そのため、個々の状況に応じて支援を行い、将来に向けた選択肢を広げられるよう、総合的な支援を進めてまいります。

こちらは、中野区における不登校支援施策を一覧にしたものでございます。

「学校に来られるかどうか」だけではなく、「どのように学び続けるか」が重要でございます。そのため、多様な学びの場の確保と安心して相談できる環境を整備しています。多様な学びの場として、学校での校内別室やチャレンジクラスなどの支援、教育センターでのフリーステップなどでの支援、そしてオンラインでの支援を組み合わせながら、一人ひとりに適した学びの場を提供しております。

安心して相談できる環境づくりとして、スクールカウンセラーや心の教室相談員、スクールソーシャルワーカー、教育相談室などの相談体制を整えております。

子どもたちが中学校を卒業するまで無理なく安心して学び続けられるよう、多様な選択肢を用意しております。

不登校の生徒につきましては、進路指導におきましても、状況に応じた個別支援が必要です。右側にお示ししたフロー図は、フリーステップルームに通う中学3年生を対象とした進路指導の流れです。

5月には、進路全体の見通しや都立高校について学びます。6月には、自己理解を深めながら、チャレンジスクールや通信制高校について理解を広げます。7月には卒業生の体験談や学校説明会を実施し、具体的な進路選択へとつなげていきます。

さらに、秋以降は、志願申告書や作文、面接練習など、受験に向けた実践的な支援を行っています。

不登校生徒については、一人ひとりの状況に応じて個別対応を行い、必要に応じてスクールソーシャルワーカーが学校見学などに同行するなど、丁寧な支援を行ってまいります。

中学卒業後も多様な学びの場を確保することが重要です。

進学先としては、全日制高校だけでなく、都立や私立の定時制高校や通信制高校、高等専修学校、サポート校など、様々な選択肢があります。

また、教育委員会だけでなく、子ども・若者相談課や福祉部門などとも連携しながら、卒業後も切れ目なく支援が受けられる体制を整えております。学びの継続と社会的自立の実現を支えることが大切だと考えてまいります。

こちらは、過去3年間の進学状況です。

まず、進学先の種別を見ますと、令和7年度は82人中43人が通信制高校へ進学してお

一方で、全日制高校や定時制高校へ進学する生徒も一定数おり、多様な進路選択が行われていることが分かります。

続きまして、こちらは本区の不登校生徒の進学実績がある都内の高等学校等をまとめたものでございます。

また、区外の学校につきましても、杉並区や練馬区、新宿区など、近隣の学校に多くの生徒が進学してございます。

また、フェリーチェ高等学院の生徒は、フリーステップルームで、特にイベントなどを行うときにお手伝いに来てくれています。

最後に、区内の高校に進学したフリーステップルームやまごころドーナッツに通っている生徒の声を紹介いたします。

以上、「不登校生徒の進路について」、ご説明をしました。

今後は、不登校生徒の中学校卒業後のフォローアップや、通いやすい進学先の確保につい

ても、皆様とともに考えてまいりたいと考えてございます。

ご清聴ありがとうございました。

[総務部長]

それでは、「不登校生徒の進路について」、意見交換をしたいと思いますので、ご発言をお願いいたします。

[区長]

質問なのですが、不登校の定義は年間30日以上休んだ子ということでもいいのですかね。

[教育長]

そうです。現在は、年間30日以上学校を欠席していることが不登校の要件となっています。フリーステップルームなど学校以外のところに出席しているのは、文部科学省がそれを出席と認めるよう示されていますが、この不登校の指数の中には、それらの出席日数は入らないという状況です。

[総務部長]

他にご発言ありますでしょうか。伊藤委員、どうぞ。

[伊藤委員]

不登校の方々への支援ということを考えた時に、卒業後となると、本当に卒業後のことのように思えるかもしれないのですが、私のカウンセラーとしての経験を振り返ってみますと、中学生のお子さんで不登校になられている方というか、学校に行きにくい方は、やはり自分の進路についてはすごく真剣に考えているというか、この後どうなるのだろうという不安感、たくさん持っていらっしゃるので、そういう意味では、身近なところに、行き先としてイメージができるところがそばにある。例えば、稔ヶ丘高等学校がそばにあって、そういうところも選択できるし、通信の学校も選択できるとか、何か身近なところで、行き先の見通しみたいなことがあることが、1つ希望につながるのかなということを思いました。

それと、もう1つ、不登校でないお子様でも、いろいろなご事情で私立の高校は経済的に難しいのではないかと、学力的に自分がどうなってしまうのだろうという悩みを抱えているお子さんは多数おられるのですけれども、そういったお子さんにとっても、身近なところに多様な進路があるということは、中学校時代の学びを支えることにもなるというか、その先があるのだということで頑張れるということはすごくあるなと思うので、今回、卒業後のことにはなりますけれども、長期的な視野でご提言を事務局からいただいたことはとて

も大事だなと思いました。

〔平本委員〕

私も資料を拝見しまして、やはり実際に区内の高校に進学された子どもたちの声というのが、今後の支援のあり方を考える上で、大変参考になるなというふうに思っておりまして、伊藤委員と重なるところはあるのですけれども、やはり進学先の選択肢はできるだけ多様であることが望ましくて、とりわけ中野区のこの子どもたちの声からいくと、メリットが大きいということも感じていらっしゃるのかなと思いました。

やはり地域とつながっていることの安心感というのもありますし、これまで区内のフリーステップルームとつながってきた経験なども、既につながってきているということで、いつでも相談ができたり、頼れる場所があったりという、心のよりどころという意味で、不登校の生徒さんが高校進学後も継続して通い続けられている、あるいは学び続けられている環境を区としてつくっていくという、まちづくりの観点で見ていただくと、区内の選択肢を可能な限り確保していただくことが、子どもたちにとってすごくよいのかなと思っています。

中高生向けの居場所の事業も区内でスタートするということを聞いていますので、そこを、中学校の頃からつながって、また高校に行ってもいつでも来ることができてという形で、区としても盛り上げていっていただけると、いい形になるのかなと感じています。

〔区長〕

8月1日から、中高生の居場所ということで新しい施設がオープンするのですけれども、そこも居場所として、高校生の夏休みの居場所として使っていただきたいですね。

〔高野委員〕

まず不登校のお子さん、80名から90名くらいいらっしゃるのですけれども、毎年卒業して、区内もしくは近隣の高校、定時制や通信制含めて、ほぼ進学されていて、非常に指導がうまくいっているのではないかと思います。

また、私立高校の誘致とか、なかなか難しいと思うのですが、都立高校、区内、近隣を含めて行きやすい場所に幾つかありますので、その整備を、区では難しいかと思うので、東京都に要望していただければ非常に助かると思いますので、そちらをお願いしたいと思います。

〔岡本委員〕

皆さんおっしゃっていたこととほぼ同意なのですから、普通は区の管轄は小中学校

だけなので、こんなふうに卒業後のことを考える機会って、すごく貴重だなと思いました。

さっき伊藤委員もおっしゃっていましたが、やっぱり進路不安はすごく大きいです。保護者にとっても、卒業後に子どもが学校に通い続けられるのか、学校その他、居場所がありますけれども、そこをドロップアウトしてしまったらどうなるのだろうというのは、一番大きな不安です。一番怖いのは引きこもりになってしまうことだと僕は思っています。

そうならないために、多様な選択肢が幾つもあって、ここはちょっと合わなかったら違うところを選べる、それが身近な場所にあるということはとても大切だなと思いました。

[区長]

質問みたいになってしまうのですが、不登校の子で、どこの高校に進んだかというのは数字が出ているのですけれども、その後、どういう暮らしをしているか、その先の状況というのは、教育委員会では把握はできているのでしょうか。

[教育長]

学校に相談に来るという中学生がいますけれども、なかなか難しいですね。

[区長]

相談に来なければ、もう分からないですね。

[教育長]

分からないのが多いですね。

[区長]

区として、すこやか福祉センターなどで相談する人だったら、継続的に状況は分かるということは一部あるかもしれませんが、恐らくそれもそんなに多くないかなということですね。

[伊藤委員]

おそらく、卒業してここに進学したけど、どうもやめちゃったみたいだとか、頑張っているんだとか、そういう情報は近隣の学校ですと、高校と中学校とのインフォーマルなやり取りですとか、地域のいろいろな情報の中で、意外と把握している面もあるかなとは思いますが。

ただ、フォーマルには調査をかけるというのは難しい面があって、できたらいいとは思いますが。

本当に、今回、稔ヶ丘高等学校、中野工科高等学校、フェリーチェ高等学院と地域がばらけていて行きやすいというところもありますので、行きやすいとやはりドロップアウトも減ってくるということはあるとは思いますが。

[区長]

もともとそんなに学校に行けてない子は遠いところには通いづらいですね。

[総務部長]

卒業後に通える学びの場がある、身近なところにあることが重要だというようなご発言がありましたけれども、その点に関連して、教育長はいかがお考えでしょうか。

[教育長]

繰り返しになってしまうのですが、不登校対策というと、義務教育段階に焦点が当たりがちですが、私はもともと中学校の校長をやっていたので、中学校卒業後の進路の保証も非常に重要だと考えています。

不登校を経験した生徒の中には、高校進学そのものは実現できても、その後、学びを継続していくことに困難を抱えるケースがたくさんあります。

先ほどあった稔ヶ丘高等学校とか中野工科高等学校など、非常に素晴らしい高校なのですが、やはり毎日の登校を前提とした環境にはまだ不安がある一方で、逆に完全な通信制だけでは、レポートの作成や学習計画の管理を1人で続けることが難しい生徒も少なくありません。

また、学習面だけでなく、同世代の仲間とも関わりながら、少しずつ社会とつながりを取り戻していくことも、高校段階で非常に大切だと思っています。

その意味では、通信による学習と、対面での支援やスクーリングの両方を組み合わせた学びの場は、不登校を経験した生徒にとって大変有効な選択肢の1つであると思います。

中野区の周辺には、チャレンジスクールやエンカレッジスクールをはじめ、様々な学びの場があります。それぞれに特色があって、生徒によって合う環境は異なります。大切なのは、1つの進路に当てはめることではなくて、一人ひとりの状況に応じた多様な学びの選択肢が地域の中に確保されているということが、非常に重要なことだと思っています。

不登校対策は、中学校卒業で終わるものではないので、高校進学後も子どもたちが自分に合った形で学び続けて、社会的自立につながる環境を整えていくことが重要だと、教育委員会としても考えています。

[岡本委員]

関連した話ということで、前提として、今日のテーマは、進路のほうで多様な場を用意していきたいと思いますという話なのですが、そもそも不登校にならないような学校をつくっていくことが、僕は大前提だと思っています。

しんどいなどいろんな理由があって行けないと思いますけれども、学校はしんどい場だから行けないのだとしたら、しんどさを前提としている学校ではない学校のあり方を考えたいと思っています。

多様な子どもや保護者がいると言われて、全てを学校だけで包摂するのは本当に大変なので、そのために学校運営協議会ができて、学校運営協議会を通して学校を地域にもっともって開いていく、いろんな場所で子どもたちが学んでいける、地域も全て学校になっていく、そういった考え方になっていければなと思っています。

先ほど、4枚目のスライドで多様な学びの場をご紹介いただいたのですが、僕は、これはまだまだ正直、学校が囲い込もうとしているなという印象がありました。もっと地域のいろんな場所で子どもは学び育っていくという前提に立ててもいいのではないかなと思っています。

〔伊藤委員〕

それに加えて、今、多様な場というお話と、学校が楽しくというお話がありましたが、私も学校が生き生きとした場になることはものすごく重要なことだなと思っています。また、多様な場があることも、同じく重要だと思います。

それともう1つ、今回改めて認識したことなのですが、個々のお子さんと接しているときは常に思っていることなのですが、その子にとっての時間の意味というのがあって、例えば、中学2年生から突然行けなくなったけれども、2年間ぐらいしたらすごく元気になるとか、いろんなスパンで、いろんな経験をされる、いろんな心の成長が見られるお子さんがいらっしゃるので、そういう意味では、中学3年生というところまでの支援だと、その先のところがとてももったいないことになってしまうということはまああって。

中学3年生のところで自分なりに頑張って次の進路にチャレンジするのだけれども、先ほど教育長がおっしゃったように、そこでまたゆっくりしながら、元気になるのは高校3年生だったとか、そういうお子さんもたくさんおられまして、今、本区の幾つかの大学で教えたりしていますけれども、大学に進学する不登校を経験したというお子さんは、今はもうめずらしい時代ではないので、今は多様な進路があることで、その先の進路も広がっていくということ。就職先あるいは様々な専門学校、大学、いろんな進路が高校に行くことで広がっていくということは、とてもあるのではないかなとも思っています。

ですので、そういう意味では、多様な時間の使い方という意味でも、いろんな支援の場があることはすごく大事で、手厚い支援になっていくのではないかなと思います。

[区長]

学ぶ場所もいろいろ多様であってもいいし、その時間の使い方も多様であっていいということですね。

[総務部長]

お子さんに沿った多様な学びの場ですとか、子ども、生徒時間をかけて寄り添うような対応も重要だというご発言もございました。

先ほど岡本委員からは、学校運営協議会、地域との関係のご発言もありました。そういった様々な視点があろうかと思いますが、この点についてご意見がありましたらお願いいたします。

[区長]

岡本委員に質問です。コミュニティ・スクールは始まったばかりだとは思うのですけれども、子どもたちにとってのコミュニティ・スクールというのは、今どういう状況だと思いますか。

[岡本委員]

地域がそもそも活発で、学校と地域が密接につながっているところは、学校運営協議会制度ができたことで、オフィシャルに、地域と学校が密接に結びついて、子どもが地域につながる教育活動を展開されていると思っています。

そうではなかったところは、なかなか学校運営協議会、コミュニティ・スクールのイメージが、学校も委員も、それぞれが持てておらず、ただ、学校の状況を聞いておしまいみたいになってしまっているところも正直あるそうです。

学校運営協議会は直接子どもに関わるわけではないので、どうやって子どもとつながっていくか、子どもにつながる活動をしていくかというのが大きな課題です。

[伊藤委員]

今、コミュニティ・スクールのお話が出ましたが、中野区もそういう学校があるようですし、他地区でも大学生など、卒業生で若い人がコミュニティ・スクールのメンバーになっているという学生も増えてきているようです。子どもたちにとっても、直接は関わらないけれど、卒業生のお兄さんお姉さんが関わってくれているのだということだとか、そうやって地域とつながって自分たちの生活の場があるのだということを実感できるような、そういう状況というのは、コミュニティ・スクールということによって、だんだんさらに展開されるのではないかなと思っています。

そのことと関連して、心理学でよくアンカーポイントということを使うのですが、アンカーって、錨(いかり)のような。自分が落ち着ける何かというのがあることが大事で、例えば、小学校のときに知っているスクールカウンセラーが中学校にもいるとか、あと今回の例で言えば、中学校でフリースクールに行って、そのフリースクールと連携しているところが高校としてあるとか、何かそういう地域の中に身近なところで、心のよりどころみたいになるところがコミュニティにあると、とても健康が保たれるというようなことも言われますので、そういう意味では、卒業生がコミュニティ・スクールで戻ってくる。自分たちも不登校のときがあったけれども、不登校しながら中野で学べて、またそこで少し元気になって、またボランティアとかでお返しできるとか、そういうふうにアンカーポイントが展開しながら、子どもたちが多様な体験を積めて、地域の中で、地域も活性化していくみたいな、そういうのが教育大綱に書いていただいたようなことを実現している姿なのかなということをおもいました。

[区長]

そうすると、多様な選択肢があるということが必要で、その選択肢も、地域の人やほかの学校などにつながることによって、アンカーポイントが提供される可能性があるということですね。

[伊藤委員]

もちろん、元の中学校とか元の小学校の人とは会いたくないという瞬間があったとしても、緩やかに、どこかにアンカーがあったり、そのアンカーからの鎖の長さはいろいろだったり、時間もいろいろだったりするけれど、何か居場所となるようなところがたくさんあるというのは、すごく大きなことだと思っています。

[平本委員]

今みたいな情報というのも、なかなか不登校の子どもたち自身とか、親自身が自分たちで取りに行くというのは難しい実情があるかなと思ってまして、我々教育委員会としても、いろいろな場の情報とか、様々な学び方の情報というのはなるべく発信していくのが良いねということは、普段から話しているのですけれども、できれば区としても、そういう情報提供が必要な人に届くような形で、どのように進められるかというのを、より考えていただけると大変ありがたいかなと思っています。

[区長]

分かりました。それは我々も喜んでやらさせていただきます。

[総務部長]

1つ目の議題につきましては、身近に通える場があることの重要性や、選択肢の多さ、それから多様な学びの場があるといったことがさらに、地域とつながることの安心感や保護者の不安の解消にもつながっていくのではないかというような、そういったご発言がございました。

一旦、1つ目の議題はここまでということにさせていただいて、もう1件のほうの議題に移らせていただきたいと思います。

議題の2つ目は、「子どもが考える修学旅行について」です。指導室長から資料の説明をお願いいたします。

[指導室長]

では、続きまして、「子どもが考える修学旅行について」と題しまして、中野区が進める子どもの意見を反映した教育活動の一つとして、修学旅行先の決定に子どもたち自身が参画した取組についてご説明をいたします。

まず、本取組の背景です。

中野区教育ビジョン第4次では、「豊かな心を育む教育の充実」を掲げております。また、令和4年に策定した「中野区子どもの権利に関する条例」の趣旨も踏まえ、子どもたちが自分の意思や考え、思いを表明する機会を充実させることを重要な取組として位置づけております。

現在、区立小中学校では、子どもたちの意見を教育活動に反映させる様々な取組を進めております。例えば、子どもの意見を反映した予算の活用、学校行事の実施、授業づくりなどです。その中でも修学旅行は、多くの生徒にとって学校生活最大の行事の一つであり、自分たちの意見を反映させる意義が大きいと考えました。

そこで、修学旅行先の選定についても、生徒が主体的に関わる仕組みづくりを進めました。

本取組の目的は、「子どもを主体とした学校教育」の実現です。従来は、大人が中心となって決めていた修学旅行について、生徒自身が候補地を比較し、調べ、話し合いながら決定することで、「自分たちで修学旅行を決めた」という実感を持てるようにすることを目指しました。

また、この経験を通じて、学校への愛着や主体性を育み、より魅力的な学校づくりにつなげていきたいと考えております。

こちらは、生徒に提示した修学旅行先の候補地です。候補地は、教育委員会と校長会で協

議し、学習効果や安全性、移動距離などを踏まえ、5つのエリアを設定しました。具体的には、青森・函館エリア、北陸エリア、奈良・京都エリア、広島・京都エリア、九州エリアでございす。それぞれに特色のある学習資源があり、平和学習、歴史学習、地域文化学習など、多様な学びが可能な候補地となつてございす。

こちらは、各候補地の特徴を比較した一覧です。学習内容、地域の特色、見どころなどを整理し、生徒が比較検討しやすいよう作成いたしました。

本日は、詳細な説明は割愛いたしますが、生徒たちはこの資料などを活用しながら、それぞれの地域でどのような学びができるかを考えながら検討を進めました。

こちらは、修学旅行先決定までの全体の流れです。

まず、教育委員会と校長会で候補地を選定し、その後、旅行会社と連携して説明資料を作成しました。各学校では、教員が保護者と生徒へ説明を行い、生徒同士の話し合いを通じて行き先を決定しました。

その後、決定した行き先をもとに、学校と旅行会社が具体的なプランを作成していきます。教育委員会は、子どもたちの主体的な選択を支える環境整備を担い、最終的な決定は各学校で行うことといたしました。

こちらは、生徒が決めた1つ目の事例です。教員による説明の後、生徒一人ひとりが興味を持った候補地について調べ学習を行いました。調べた内容を学年全体で共有し、その上で投票を実施いたしました。最終的には決選投票を経て、行き先を決定いたしました。

学校からは、子どもたちの選択肢が広がった、自分たちで選べることへの気づきにつながったなどといった声がありました。また、探究的な学習をより深める必要性を学校として実感したとの報告も受けております。

この事例では、自分たちで選ぶという当事者意識と、主体性の育成が大きな成果となりました。

続いて、別の学校での事例です。

こちらは社会科教員が各候補地の歴史的・文化的価値について専門的な説明を行いました。その後、各学級でメリットやデメリットを議論し、候補地を絞り込み、最終的には学級委員による代表者会議で決定をしました。重要なのは、単なる人気投票ではなく、どこでどのような学びができるのかという教育的視点で議論したことです。

学校からは、社会科教員の専門的知見を生かすことで議論が深まり、生徒が学習として修学旅行を考えることができたとの評価がありました。

こちらは、実際の決定結果です。青森・函館エリアが4校、奈良・京都エリアが3校、九州エリアが2校となりました。学校によって選択決定は異なりましたが、いずれの学校も生徒が比較検討、議論を重ねて決定をしております。重要なのは、どの行き先になったかではなく、生徒たちが納得感を持って意思決定のプロセスに参加できた点にあると考えております。

こちらは、各学校から報告された主な成果です。生徒からは、ここまで自分たちで決められるとは思わなかったという声が聞かれました。また、教員から指示されなくても、自ら見学地や地域の文化について調べる姿が見られました。

教員からも、修学旅行の意義や目的を生徒と一緒に考える機会になったとの意見が寄せられています。

本取組は、修学旅行先を決めること自体が目的ではなく、自ら考え、対話し、決定する経験を通して、主体的な学びを育てる取組として、一定の成果があったと考えてございます。

以上、「子どもが考える修学旅行について」ご説明をいたしました。

今後、修学旅行の教育的意義についての理解をさらに深めていくとともに、生徒の主体性をより効果的に育むための修学旅行のあり方について、検討を重ねていきたいと考えております。

委員の皆様から、忌憚のないご意見をいただければ幸いです。

引き続き、子どもたちの声を大切にしながら、よりよい教育活動の充実に努めてまいります。

ご清聴ありがとうございました。

[総務部長]

それでは、「子どもが考える修学旅行について」というテーマで意見交換をお願いいたします。

[伊藤委員]

修学旅行の教育的な意義は、すごく多様に考えられて難しいなと思うのですが、私が強く感じるのは2点ございます。

1つは、やはり公教育ということを考えたときに、いろんなお子さんがいらっしゃるの、いろんなところにご家族と出かけていらっしゃる方もいらっしゃれば、様々なご事情の中で、あんまり遠くに行く機会はないというお子さんも、中学校の段階ではいらっしゃると思うのですね。

そうしたときに、様々な遠方の地域の文化を体験したり、様々な本物の文化財を見るという体験が得られるというのは、すごく大きな意味があるのではないかなと思いますし、また、子どもたち同士の触れ合いということを考えても、思い出に残るものなのではないかなと思っています。それだけでも修学旅行は貴重だと考えています。

もう1つは、修学旅行だけでなく、ほかの行事にも言えると思うのですが、やはり今、いろんなものが気軽に手に入ってしまうというか、完成品が気軽に手に入ってしまうということがあるので、お金を出して完成品を買うという体験のほうが、どうしても多くなってしまって、工夫してつくるか、プロセスをいろいろ考えるか、そういう経験が少なくなってしまうことが多いように思うのですね。

そうすると、お金で買うというイメージしかないと、お金がないイコール駄目だとなってしまうけれども、そうではなくて、みんなで話し合ったり、工夫をしたりすると、それは面倒くさいかもしれないけれども、そこに面白さがあったり、そこに達成感があったり、そういう経験をすることで、成長するということがあると思うので、そういう経験を行事や修学旅行を通して、して下さるといいなと思っています。修学旅行でも、自分で行き先を選ぶというのは、工夫に一步つながって、とてもいいのではないかなと思いますし、できれば行き先を決めるということだけではなくて、行った先で何をするのかとか、そこで自分たちはどんな体験にしていきたいのかとか、これをどう自分たちはやっていくのかという主体的な意識というのを、少しでも広げてみる機会になるといいのではないかなと思っています。

〔高野委員〕

修学旅行先を生徒さんご自身で決めるというのは非常にいい取組だと思います。小学校のときは、移動教室で決まった軽井沢と日光に行ったところもあると伺っていますが、そういう学校で決めたところに行くだけではなくて、自分たちで行き先を選ぶというのが大事かと思います。

また、さきにお話ししたとおり、友達と一緒に旅行するという、なかなかない機会ですので、それを中学生のうちに体験していただくというのが非常に思い出にも残りますし、単なる地域の学習だけでなく、そういう人とのつながりとしても、大事な経験になるのではないかと思います。

生徒さんが選ぶということで、かなり教員の負担は重くなってくるとは思いますが、毎年同じところに行っているほうが恐らく先生方の負担は非常に軽いとは思いますが、

今回に関しては負担が増えても、それを、生徒さんの自主性を生かしていただきたいと思います。

また、プロセスについても学校によって異なるということで、これもどちらがいいとかではなく、生徒さんたちにできれば決めていただければいいかなと思います。

できれば、全体フローの日程がタイトですので、なかなか旅館とか予約をとるのも大変だとは思いますが、できればもうちょっとこの日程に余裕を持たせていただいて、生徒さんたちが調べたり、学んだりする時間がもう少しとればより良いかと思います。

将来的には、各学校でグループごとに違うところでもいいかなと思うのですが、ますます負担が重くなってくるので、ちょっとそこまでは難しいかと思いますが、ご検討いただければと思います。

〔岡本委員〕

この間、教育委員会の中でも、今もお二人のお話ありましたが、プロセスが一番大事だということを話していました。行き先は結局どこでもいいといえどどこでもいいのですが、どうやって決めたのかが大事です。たとえ自分が行きたい場所ではなかったとしても、伊藤委員がおっしゃっていましたが、修学旅行当日までの中で、できるだけ多くの生徒さんが関わって、判断して、意思決定ができるような場面を多くつくってほしいという話がありました。その中で子どもの主体性が育まれていくと思います。

スライド4枚目に、「子どもたちが『主体的に修学旅行のプログラムを決めた』と実感でき」とありましたが、本当に子どもたちが実感できたのかどうか、ぜひ子どもたちに今後、アンケートもとっていただきたいと思っています。

以前、中学校のPTAの人に「あなたの学校ではどうやって決めましたか」と聞きました。私が聞いた中では、全員に説明をして、クラスに戻ってフォームで回答して、その1回で決めたという学校がありました。これだと正直、ただの人気投票です。全然プロセスが大事になっていない。クラスの中で話し合っただけで決めたということもありましたが、どうやって話し合ったのかが一番大事だと思っていて、そこがまだ見えていません。今後、ぜひ来年度にこういったところも検証して、つなげていきたいと思っています。

〔平本委員〕

既に皆様からいろいろご意見出ているところですが、私自身は、自分の子どももちやうど小学校・中学校世代なので、修学旅行の教育的意義って何だろうと子どもの目線で考えたときに、やはり共同、友達と一緒に行動して何かをつくり上げていくこと。また、親元

を離れて、いつもと違う場所でいろんな経験をするということで、新しい人間関係がつくられていたり、学校とか友達に対する気持ちがより前向きになったりする、非常にいい機会になっているかなというふうに思っています。

併せて、伊藤委員からもお話があったとおり、やはりなかなか日常生活の中では、歴史や文化、あと、体験でそれらを実感する機会というのが、親がお金をかけたり、場を提供したりしないと、差が生じてしまっている時代なので、そういう意味でも、そこを自分たちで仲間と一緒に経験して、理解を深めて帰ってきて、また授業で似たような流れができるのはとても良いと感じています。

皆さんからもお話が既に出ているとおり、プロセスがとても大事なので、行き先をただ決めたにならないように、できるだけ学校の探求的な活動等につなげながら、まず修学旅行でどういうことを自分たちがしたいんだっけ、どういうことを得られるといいかなという目的を自分たちで意識しながら考えていく体験自体がとても大事なかなと思っているので、そういうところを先生方にサポートしていただきたいと思っています。

先生方が理解していないと、なかなか、場所はここがあるよ、ここから選ぼうという、もう選ぶだけ話になってしまうので、どういう目的で選びたいかいうのを、話し合いができるとうごくいいかなと思っています。

それは全然1つではないと思うので、例えば、今回は地域の歴史や文化を学ぶ体験がたくさんできるような旅行にしたいんだというのもあっていいと思いますし、多文化共生について学べる場所がいいなという考え方もあると思いますし、人権をテーマに、いろんなところを巡ってみたいという考え方で選んでもいいのかなと思っていて、仮に、自分の行きたい場所にならなかったとしても、得るものはあると思いますし、ほかの子たちからとか、あとは実際に行った先輩たちから、何かプレゼンテーションで聞けたりすると、また興味とか学びが広がっていくのかなと思っています。

既に中野区というのは、歴史や文化を盛り上げて、後押ししている地域だと思いますので、何かそういった連携とかが行事との組合せであったりすると、修学旅行の教育効果も高まっていて面白いのではないかなと思います。

[区長]

学校の先生から大変だという、何か苦情はなかったのですか。

[教育長]

いえ、特に苦情は来ていません。

岡本委員や高野委員からご意見をいただいて、今回、修学旅行の無償化と併せて、生徒自身が行き先を選ぶという方向にしました。

ただ、いろいろご意見をいただいて、やはり決めるまでの日数的なものが非常にタイトではないか、それはもう十分、分かっているのですけれども、やっぱり中野区の学校は、最低の中学校でも100人以上、生徒さんがいますし、多い学校は200人以上の生徒さんがいますので、宿を確保するためには、どうしても2年前の早い段階で予約をする必要があり、今回はどんなに遅くても6月末頃までには各学校決める必要がありましたので、そこを前提に決定をしていくという形にしました。

今回の取組の価値は、やはり旅行先を選ぶことだけではなくて、どこで何を学びたいのかということをも自分たちで考えて、仲間と議論して意思決定をする、そういう過程が大事だと考えました。行く先を調べ、学習テーマを考え、計画を立てる段階から、様々な学びがあったと思っています。

実際に、学校ごと、非常に丁寧にやってくださった学校もありますし、なかなか運動会やほかの行事もあるので、その行事の中で修学旅行だけに特化してということは、なかなか難しく、十分時間をかけられなかった学校もあるかと思います。その点については、今後も検討していきたいと思っています。

ただ、生徒からは、「ここも見学したいのだけれどもお金が足りない」とか、あるいは、「どうしても飛行機や新幹線に乗ると時間がないので、ここを見たいのだけれども見学できないのではないか」というような意見も出ています。

私はこのことは、子どもたちが単に旅行を楽しみにしているだけではなくて、限られた予算や時間の中で何を優先してやるのかという、そのこともこれから真剣に考えていってほしいなと思っています。

実社会においても、全てを実現することはなかなか難しく、条件の中で、本当はここも行きたいのだけれども時間もないからここは諦めて、また大学や社会人になったら行ってみようという判断をしてもいいのではないかなと思いました。

特に、今回の取組を検証しながら、選択肢のあり方や学習内容のさらなる充実について、教育委員会も検討していく必要があると考えました。

例えば、九州であれば、平和学習や産業学習と思いがちなのですけれども、子どもたちは軍艦島をはじめとする世界遺産や日本の近代文化の歴史を学びたいなんていう意見もあったので、そういうことも考えると、九州でなかなか予算的、時間的なものも厳しいなという

こともありました。

最後に、やはり無償化によって家庭の経済状況にかかわらず、全てのご家庭や生徒が安心して参加できる環境が整ったことは、大変意義のあることだと考えています。

これからも、参加機会の保証と主体的な学びの両立を考えながら、よりよい修学旅行になるように、教育委員会としても考えていきたいと思っています。

〔伊藤委員〕

今のお話に続けてなのですけれども、プロセスの中で、自分は九州に行きたかったけれども、青森へ行きたい人もいるのだとか、京都がいい人もいるのだとか、ほかの人の意見を聞くだけでも、やはり小学校を卒業して、中学1年生になったばかりのお子さんにとっては、「ああ、人って自分と違う意見をいろいろ持っているんだな」と実感できる、そのことだけでも心の成長につながると思うので、ぜひこういう子どもが主体的に考えるというようなことは続けていけるといいと思います。そのことによって、また先輩が「中学に入るとすぐにこういうことあるから、小学校のうちに考えておいたほうがいいよ」とアドバイスしてくれるかもしれませんし、年を重ねることによる成熟という、制度の成熟ということもあると思うので、続いていくといいなと、子どもが使える予算もそうですけれども、ある程度継続していくといいのかなと考えています。

あとは、時期が早いことも理由があって、2年前に予約しなければいけないとしたら、そういうことも子どもたちにきちんと伝えて、世の中にはそういう仕組みがたくさんあって、その仕組みの中で自分たちは暮らしているし、その仕組みを自分たちで考えていくべきものなのだとということを実感するということはすごく大事なので、ただ、誰かがやってくれて、何か知らないけど、どこかへ連れていってもらったという経験でなく、その背後にはいろんな人がいろいろと考えて、皆さんの税金でこうやって行けてというような、それも子どもたちが学べるようであるほうがよいのかなと思いました。

〔区長〕

最近、教育委員会や学校は、いろいろな工夫をしていただいて、子どもたちの意見をなるべく学校の運営に反映しようと努力されているというのは見ていて分かりますし、この間、中野中学校の運動会を見に行った時、見たことのない独創的な競技ばかりでしたが、みんな楽しそうにやっているのですね。事情を聞くと、「子どもたちが全部アイデア出して競技を決めた」とおっしゃっていて、自分たちで決めた運動会になっていました。予算に加え、修学旅行や移動教室なども含めて、中野区としてこの取組みを徹底的にやっていくという

のは、面白いかなというのは思います。自分たちでどういう決め方をしたら今回こうなったという、ややマニアックな話になりますが、そうしたことも含めて、探究的な学びにつながるというのはいいなと思いますね。

今、子どもたちが旅行しなくなっているというデータも出ているようですが、学校教育の中では、探究心や主体性を学ぶ必要があると思いますので、このように自ら調べて、例えば、「自分はここに行きたかったが、多数決などで別の行き先になったので、今度は個人でここに行ってみる」と、そうやっていって、旅行するきっかけになるのも大きなことだと思いますので、本当にこの取組みを実施していただいてよかったなと思います。

〔高野委員〕

岡本委員がおっしゃったように、いろいろな選び方があって、G o o g l e フォームの多数決 1 回で決めてしまうというのも、なかなか今の子どもたちらしい決め方だなと思いました。

スケジュールがややタイトなのですが、できれば子どもたち自身で希望の場所のプレゼン資料をつくっていただいて、その中で「こっちがいい」「いや、こっちがいい」と討論を重ねていただければよかったかなと思うのですが、日程的には厳しいかもしれないので、また今後できればと思います。

また、修学旅行先が決まったとしても、決まったのはおそらくエリアと宿だけになるかと思うので、その中で、どこに行くかとか、どういったことをやりたいかというのは、これから 2 年間かけて決めていただけると思うので、中にはグループごとになるかもしれませんが、団体行動で行くところも、できれば生徒さんたちで話し合っ決めていただければと思います。

〔岡本委員〕

今、区長がおっしゃったように、修学旅行のこの取組だけで終わってはすごくもったいないですね。子どもたちが自分たちで声を上げて学校をつくっていけるんだという、学校文化に広がっていけばなと私も思いました。

取組の効果で、生徒さんの声で「主体的な学びへの意識を育む貴重な機会となった」とありまして、主体的な学びは修学旅行だけではないので、全ての教育活動において、主体的な学びにつながるような学校になってほしいと思います。

〔総務部長〕

様々なご発言、ありがとうございました。公教育としての修学旅行の重要性や、誰もが参

加できる機会の確保、それから無償化の効果といったご発言がございました。

また、生徒たちが主体的に考え、話し合い、工夫しながら決定していく経験や、そのプロセスそのものが成長につながることから、こうした取り組みはこれからも続けていくことが重要ではないかというご意見や、そのような機会を通じて、人間関係の構築や前向きな姿勢の醸成にもつながること、さらには修学旅行以外の場面についても同様の取り組みを引き続き検討いただきたいとのご発言があったかと思います。

本日の議題についてはここまでということにさせていただきます、全体を通じて、各委員の皆様とそれから区長に最後ご発言をいただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

〔伊藤委員〕

教育についてご支援いただいておりますし、小さいお子さんから、こうして高校世代あるいは若者世代の方まで幅広く子どもたちに目を向けていただくことは地域に返ってくると思っています。自分を育ててくれた環境というところは、子どもたちにとってかけがえがないので、ぜひ今後も教育に対して、いろいろとご支援いただきたいと思っています。

先ほど区長が、こういう主体的な取組を徹底的にやったら面白いのではないかとおっしゃっていましたが、本当にそれは先進的な公教育を考える取組になっていくのではないかなとも思いますので、ぜひ子どもたちの気持ちに沿いながら、いろいろとご支援いただけるとありがたいなと思っていますので今後もよろしくお願いいたします。

〔高野委員〕

今回の話題とは関係ないことになってしまうのですが、熊本での震災もありましたし、小学校での火災事案もありましたし、児童生徒さんたちの安全を確保する意味で、ハード面やソフト面、人材面でも、対応をこれまで以上に強化していただければと思います。

〔平本委員〕

私は、毎年1回はこのような区長と意見交換をする機会をいただけることが大変ありがたいと思っています、中野区は若者たちといいまちをつくっていくということを前向きに発信してくださっていて、その中に必ず子どもたちとか、教育というのを大切に位置づけているということが広まってきていると感じています。

教育委員を3年経験してきて、とてもよくなっているというか、中野の教育で面白いことをしているというのは私も感じていますし、やはりこういう予算をつけて、子どもたちに考えてもらって、いろいろ新しい取組をしてもらっているというのが、少しずつ広まって

いるかなと思いますので、ぜひここはより力を入れて、発信もして、そして不登校の生徒さんの意見もしっかりお聞きして、そして高校に行ってから子どもたちが、また自分の将来を選択して、それを中野に還元したいなと思ってくれるような、大きな意味でのまちづくりが実現できるといいかなと感じております。今後もお力添えをお願いします。

〔岡本委員〕

多様性の包摂と主体性の育成という、私は教育の二大難しいテーマだと思っていますけれども、本日は突っ込んだ議論ができたのではと思っています。

それはやはり中野区だからできているのだろうなとも思っています。その意味では、とてもありがたい地域です。私たちもアピールを忘れずに、これからも教育行政の充実に努めていきたいと思います。

〔教育長〕

昨日、日帰りで軽井沢少年自然の家を訪問しました。今年採用された新規採用教員が約60名参加し、2泊3日の宿泊研修が実施されました。

ほかの地区では実施していないということで、教員同士が交流しながら悩みや課題を共有するとともに、指導主事が一人ずつ面談を行いました。中には、教職への不安を抱えながら率直な思いを語る教員もいたようですが、そのような学びの場がある環境は大変意義のあるものだと感じました。

私からも参加した教員に話を聞き、「中野区の教員になってよかった？」と尋ねたところ、多くの教員から前向きな意見が寄せられました。給食のおいしさ、ICTの環境整備、それから周りの教員の支援体制などに触れながら、教員としてやりがいがあると言っていました。

中野区は良い教員がたくさんいるので、これからも頑張っていきたいと思います。

〔区長〕

本日はありがとうございました。このように意見交換できる機会をしっかりと持っていくことが必要だと思います。今日のテーマについても、例えばコミュニティ・スクールの話が少し出ましたが、コミュニティ・スクールの現在地が今どのような状況にあり、今後どういったことに取り組んでいくべきかといった、既にあるテーマについても議論することにも大変意義があると思います。ぜひ、委員の皆様から発議いただくこともあって良いと思いますし、我々としても定期的にこういう機会を設けていきたいと考えております。

先ほど教育長から発言もありましたが、先生方のパフォーマンスが上がるのが、教育の

パフォーマンスの向上につながるという点については、そのとおりだと私も思いますので、そのような意味でも、総合教育会議が、教員を取り巻く環境の充実に向けて力を発揮できればなと考えておりますので、今後ともよろしくお願いいたします。

[総務部長]

それでは、以上をもちまして、本日の中野区総合教育会議を閉会いたします。

ありがとうございました。

【午前 11 時 39 分閉会】